

ロシアにおける日本語教育の現状と問題点

The present condition and problems of Japanese language education in Russia

文学研究科社会学専攻博士前期課程修了

藪 崎 義 雄

Yoshio Yabusaki

I. 本論文の概要

ソヴィエト社会主義共和国連邦の崩壊から15年が経った今、ロシアにおける日本語教育は、大きな変革のときを迎えている。

ソ連時代から、当地の日本語教育は、極めて高い水準を誇ってきた。社会主義社会にあって学習者たちは、日本に行く機会が稀少で日本人と実際に接触することも殆どなかった状況の中で、高度な日本語を身につけ、日本学者や日本語学者となって日本研究をリードしてきた。そこで行われた日本語教育の独自性と有効性は、当時ソ連から来日する学生の「変に堅くはあるが高水準の日本語能力」（稲垣、1994、矢沢、1996）にも裏付けられていたし、現在日本の各地に留学しているロシア人学生たちの日本語にも確かにそれをみてとることができよう。

しかしながら、現在彼らを取り巻く日本語の学習環境には、様々な問題点が含まれていることも事実である。

本論文では、現在のロシアにおける日本語教育がいかなる問題を抱えているかを、多方面から分析していく。そして、その問題点を明らかにすることによって、今後のロシアの日本語教育が向かうべき方途を提示して参りたい。

II. ロシアにおける日本語教育の現状

ロシアにおける日本語教育は、300年以上の歴史をもっている。江戸時代中期、漂流民としてカムチャツカに流れついた日本人を、時の皇帝ピョートルは、日本語教育にあてたのだ。最初の日本語学校は1705年、大阪出身の商人デンベイによって開かれた。また、薩摩の商人ゴンザは、科学アカデミー図書館次長アンドレイ・ボグダノフと共に露日辞典を編纂した（それは、世界最初の露日辞典であると共に、薩摩の庶民の言葉で綴られているため、郷土研究の見地からも貴重な資料となっている）。また、伊勢出身の大黒屋光太夫の漂流体験に関しては井上靖著『おろしや国酔夢譚』に詳しく描かれ

ている。

こうして、不遇かつ数奇な運命を背負った日本漂流民たちによって開かれたロシアにおける日本語教育は、以来、時に下火となるも連続と受け継がれ、ソ連時代以降、その活動は顕著に活発化するのである。

1976年に『大学時報』に掲載された調査報告によると、当時ソビエトには、日本語を専門語として教える高等教育機関は6つあった（中村・グリヴニン、1976、p.50）。そこには、その機関名、学習者数が以下のように示してある。「モスクワ大学付属アジア・アフリカ諸国大学—約100名、レニングラード大学東洋学部—約30名、国際関係大学—約30名、ウラジオストック大学東洋学部—約100名、ノヴォシビルスク大学外国語学科—約20名、キエフ大学東洋学科—約30名」。

一方近年、国際交流基金がまとめたロシアにおける日本語教育機関調査（2003年現在）では、2003年現在、機関数は高等教育機関のみで72、学習者数は5000名以上に上り、ソ連時代から比較すれば、大幅な伸びを示している。この調査はロシアのみを対象としているので、ウクライナやベラルーシ等、他の旧ソ連諸国を含むとすると、どれだけの数となるか想像し難い。ウクライナのみを例にとってみても、全土の19を越える高等教育機関、20の初等・中等教育機関及びそれら以外の講習会等において、約2000人が日本語を学習するに至っている（2003年現在）。

以上のデータは、いずれも、ロシアにおける日本語教育が拡大傾向にあることを示している。

また、近年、学術機関や民間団体の交流の活発化によって、より多くのロシア人学習者に、実際に日本を訪れて日本の風土を体験する機会が開かれた。文部科学省や国際交流基金、政府及びそれに準ずる機関が、様々な留学プログラムを提供しており、また、大学によっては日本の大学と独自に協定を結び、交換留学を行っているケースもある（例：モスクワ国立大学付属アジア・アフリカ諸国大学には、創価大学、東海大学、龍谷大学、早稲田大学、青山学院大学等との交換留学制度がある）。

一方、日本人もロシアへ、留学、ビジネス、観光等、様々な目的で行き来するようになった。よって現地で日本語を学ぶ学生にとっても、日本人に実際に接する機会が増えたといえる。

また、さらにここ数年では、ロシア語圏の多くで、日本文化が広く流行し、その日本ブームは「日本語」に対する興味をも高めている。

こうして、ソ連崩壊後のロシアにおける日本語教育環境は、教育機関の設備、またそれらの提供する留学プログラム等のハード面からみても、日本ブームから興る日本語に対する探究心にみられるソフト面からみても、徐々にではあるが確実に、発展の一途を辿っていることは論を待たない。

Ⅲ. 筆者のモスクワにおける日本語教育の経験から

筆者は2001年9月より2003年7月までモスクワに滞在した。中でも2002年の9月からはモスクワ教育国立大学にて、日本語のオープンコースにて教鞭を執る機会に恵まれ、多くの日本語学習者と接

することができた。同大学では、その前年に日本語コース開設の動きが始まり、2002年にオープンコースの形でスタートしたのである。また同時に、様々な機関における日本語教育の現場を視察し、ロシアにおける日本語教育が抱える問題点をあらゆる角度から調査・分析することができた。

その中で、筆者は、多くの日本語学習者の間に、一定の共通した誤りが備わっていることに気が付いた。最初は、それも偶然か、または日本語に備わる難点であろうと解釈した。しかし、ロシア人教師による授業風景を頻繁にみるようになり、また、そこで使われている教科書や書店に並ぶ参考書等のページを繰る中で、そうした学習者共通の誤りの中には、明らかに、教師の教え方や教材が原因で発生しているものもあることがわかったのである。

1. 誤用例

ここではまず、多くの初級学習者に共通する代表的な誤用例を2つ挙げて、その誤りの構造、原因をみていくことにする。そこに、ソ連時代から近年に至って、日本語がどのように学習されてきたか、その学習法、教授法を垣間見ることができるのである。

(1) 誤用例1 「あなたは誰ですか」

この誤用例がどのような場面で発生するか、まずみてみよう。以下の会話は、日本人と日本語を学習するロシア人の会話である。

日本人：こんにちは。

ロシア人：こんにちは。

日本人：はじめまして。私はヨシオです。

ロシア人：どうぞよろしく。私はセルゲイです。あなたは誰ですか？

日本人：・・・？

これは典型的な誤用例の一つである。

初対面の会話の途中でロシア人が突然、「あなたは誰ですか」と聞く。日本人は、この質問にどう答えていいかわからない。「ヨシオと名乗ったはずなのだが、さらに『誰?』とはどういうことだろうか」と。また、日本の礼儀という点からみると、大変失礼な質問である。しかし実際に、こうした誤用は頻繁に行われている。

この「あなたは誰ですか」で何を聞きたいのか。

ロシア語で「Кто вы?」（日本語に直訳すると「あなたは誰ですか」）と聞くと、それは相手の職種を尋ねる質問となる。つまり、それを日本語らしく訳すとすれば「あなたはどのようなことをなさっている方ですか」となる。よって、その答えとしては、「私は学生です」とか「会社員です」、「主婦です」等といったものがあって、はじめてこの会話が成立する。しかし、こうしたロシア語の事情をしらない一般の日本人が、突然「あなたは誰ですか」と聞かれれば、当然当惑してしまう。

ではなぜ、このような誤用例が生じるのか。

このロシア人の発話者は、「кто=誰」「вы=あなた」という理解を固定して覚えている。そしてその定義は、いかなる場合にも通用すると信じ込んでいる。そこで初対面の日本人に何を職業としているかを聞く際に、まず念頭に「Кто вы?」とのロシア語を置き、それをそのまま日本語に置き換えて、「あなたは誰ですか」と発話したのだ。

確かに「кто=誰」であり「вы=あなた」である。そこに間違いはない。また「あなたは誰ですか」という日本語の文に、文法的な問題もない。ただ、授業にあつてそれだけを単なる知識として学生に教えるのでは不十分である。なぜなら言葉は往々にして、数学の方程式のようにはいかない。ロシア語の単語と日本語の単語を、対訳として「イコール」記号で結び得る例は、むしろ稀である。

語学学習者は、文法的にも翻訳としても正しいはずの文章が、別の社会では受け入れられないことがあるということを、念頭に置かなければならない。これは、語学に限らず、異文化との接触にあつては、基本的な姿勢である。外国語を学ぶ際にも、ひとつの表現がどのように相手に伝わるか、慎重に分析する必要がある。

上の例に代表される誤用は、この姿勢のない、単語から単語へと置き換えるだけでよしとする、言わば「置き換え勉強」の産物である。これに関連する、もう一つの例をみてみよう。

(2) 誤用例2 「どうぞ」「お願いします」「どういたしまして」「(～して)下さい」

この4つの表現は、ロシア語に訳すとどれも一つの言葉「Пожалуйста」となる。つまり、以上に挙げた4つの場面「どうぞ」「お願いします」「どういたしまして」「(～して)下さい」においてロシア語では、「Пожалуйста」一語で表現できるのだ。

これは、ロシア語を学ぶ日本人にとっては、大変有難いことであるが、逆に、日本語を学ぶロシア人にとっては、大変骨の折れるところである。よって当然、数々の誤用が生じてしまう。

ある日、筆者が日本語を学ぶロシア人のお宅にお邪魔する機会があった。丁寧に客間に通されて、テーブルの上にお茶とお菓子が出された。そのロシア人は微笑を浮かべて言う。

「お茶を下さい。」

筆者は、何か不思議に思いながらも、相手の側にあるお茶を取り、それを相手に手渡した。「下さい」というからには、相手が欲しがっているわけだから、それを手渡さなければならないと解釈したのだ。

お茶を頂きながらの話がはずむ中、続けてロシア人は言う。

「お菓子を下さい。」

筆者はまたしても、突然の「下さい」に遭遇し大変奇妙に思ったが、この時になって、ようやく事の異常さに気がつき、相手が「下さい」ではなく「お茶をどうぞ」「お菓子をどうぞ」と言いたかったのだと察したのである。それを相手に問いただしてみると、そのロシア人は抱腹絶倒に陥った。この場合、ロシア人は、丁寧な命令形「～して下さい」と混同したのである。ロシア語でも、この「～下さい」の部分が「Пожалуйста」にあたるのだ。これは「Пожалуйста」の誤用の一例である。

この誤用例も、多くのロシア人学習者が頻繁におかしてしまうところのものである。しかし、その原因をみても、この誤用が発生するのも決して不思議ではないことがわかる。

ロシア語の教科書を見ると、新出単語の欄で「Пожалуйста」が出てくるとき、その横に「どうぞ」「お願いします」「どういたしまして」「(～して) 下さい」と訳が並んでいるだけで、その説明がない。これでは、どのような場面で、どの訳を使えばいいのかが全く分からない。

また、これに関連して、モスクワ大学でも使用されているある日本語教科書には、「Ещё раз, пожалуйста.」(One more time, please.の意)という表現の対訳として、「もう一度、どうぞ」と記されている。この訳が100%間違いであるとはいえない。しかし、この表現で「どうぞ」が通用する場面は極めて少ない。普通は、相手に何らかの動作をもう一度お願いするのであるから、教科書には「もう一度、お願いします」と書かれてあるべきである。学生がこの表現を覚えてしまっ、授業中、教師に対して「先生、もう一度どうぞ」というのを幾度となく耳にした。不自然であると言わざるを得ない。

(3) 言語文化を視野に入れた学習を

第2言語習得過程において、誤用発生の原因を整理すると、大きく分けて次のようになる。

- ・ 既習事項からの誤った推察からの発生
- ・ 学習者の不注意による発生
- ・ 教材に取り上げられていなかったことが原因による発生
- ・ 学習者の母語の干渉による発生
- ・ 教授法及び教材の不備

しかし、誤用例を前に、これらからひとつの要因に絞り込むことは極めて難しい。というのは、実際には、様々な要因が複雑にからみあって誤用は生ずるからである。石川恵子氏は以下のように論じている。

語彙、構文、表現にかかわる誤用の多くは、誤用をふくむ文脈とそれをささえる場面での適当、不適當の判断からはじまり、語彙の選択、文法の運用、統語法等の誤用が相互に入り組む場合が多く時には学習者の母語の干渉、あるいは日本語特有の言語行動様式等も加わり、単純にその原因を断ずるわけにはいかない。(石川、1980、p.595)

誤用は「悪いこと」でも「恥ずべきこと」でもない。むしろ、語学とは間違えながら学んでいくものである。誤りをするな、などと言え、言語を学ぶこと自体が不可能になってしまう。ただし、学生が学習を進めていく段階で自然に生じる誤用と、教師の教え方が問題で生じる誤用は、明確に区別する必要がある。前者は、生じて然るべき誤用であるが、後者はそうではない。

上に挙げた誤用例2つは、そうした後者の誤用で筆者が接したものの代表例である。

誤用例①で示した「誰」という単語の意味する範囲は、日本語とロシア語では違う。日本語において「誰」はそのものの意味しか持たないのに対して、ロシア語の「誰」は、相手の職業をも含む意味で誰なのか、ということを目指す。この意味で、「誰」という単語は、ロシア語の方が広い意味範囲を有するということになる。また、誤用例②では、ロシア語においては一つの表現であるものが、日本語では場面によって幾通りもの訳となる、という例を示した。

以上で示したように、異なる二つの言語間においては、ある単語をそのまま他言語の単語に置き換えることのできない場合のほうが普通である。なぜなら、一つひとつの単語が持つ意味範囲は言語間で様々に異なるからだ。よって当然、それは表現においても同様である。一つの言語は、その国の文化や風習、そこに住む人々の生活習慣やものの考え方、そしてその歴史等を背景に成立するものである。従って、ある国で通用するものが、外国で通用するという保障はない。むしろ通用することは稀である、という心構えを持つ必要がある。

しかし、ソ連時代の日本語教育にあつて、そのような心構えは必要とされなかった。なぜなら、外国人との生のコミュニケーションは稀にしかなく、外国語が使用されたのは主として翻訳作業、しかも外国語から母国語であるロシア語への翻訳であったからだ。逆に母国語から外国語への翻訳をする場合には、相手国の言語文化を考慮しながら翻訳をする必要性が生じるが、母国語への翻訳では、そうした知識がなくともある程度自由に訳すことが出来る。

よって、当時行われた日本語教育でも、外国語がその背景にもつ言語文化や風習・習慣の分析が少なからず疎かになったのではないだろうか。

上のような誤用が生じるのは、教師が、ロシアと日本の間に存在する、そうした言語文化の違いを教えないことに、その最も大きな原因があると思われる。その違いを考慮することなく、ただ単に言葉を右から左へと訳していく。こうした授業を行うことで、学生は、ロシア語の単語と日本語の単語を、常に「イコール」で結ぶ習慣をつけてしまう。まさにここから、不要な誤用が発生してしまうことになるのである。

2. 出版物における問題

現在ロシアで行われている日本語授業が学生にいかなる影響を及ぼすか、詳しく分析・検討していくためには、そこで使用される教科書・参考書に言及する必要がある。

現在、モスクワの大きな書店には、日本語の様々な教材が販売されている。見るとその多くが独学用の教本で、最近ではCDやカセットテープといったオーディオ教材と合わせて売っているものも多い。筆者の授業に集まった学生のうちにも、以前こうした教材を使って独学に励んできた、という学生が多くみられた。

現在書店に並んでいる独学書の著者達は、殆どが、ソ連時代に日本語を身に付けた人々だ。当時の語学学習を取り巻く社会事情については後節で概観するが、言うまでもなく、閉ざされた世界の中で

少ない情報を元に日本語を学習した人々である。よって、彼らが著した教科書・参考書にもその影響が、時として、色濃くみられる。そうしたものが、現在、ロシアにおける日本語教育の現場で使用されているのである。

従ってその学習者に及ぼす影響にも特徴がある。本節では、そうした出版物にみられる問題点とその影響を分析してみたい。

(1) 筆跡への影響

日本の小学校で「書き方」の授業があるように、また「書道」という文化に現われているように、日本では、いかに美しく書くかが大変重要視される。筆跡からそれを書いた人の人格が分かる、とまで言われるので、殊の外字の美しさに注意を払う。普段いかに字の下手な人でも、手紙を書いたり、大切なものに何か書き込んだりする段になると、真剣になって筆を振るう光景がしばしばみられる。

しかし、ロシアは、他の欧米諸国と同様に、筆跡にはあまり重点をおかない。よって普通、ロシア人学生の書いた日本語には、「ミミズの這うような」字が多い。ただ、きれいでないだけなら、愛嬌があつていい。しかしそこには、残念ながら、根本的な間違いを含む字が目立つ。そして殊に平仮名においては、間違いが多く、学生に決定的に共通している。

ロシアで出版されている教科書に載る日本語は大体において、明朝体で印刷されている。これは、極当たり前のことなのだが、実はここに、誤った筆記を招く大きな原因がある。

初級者向けに「あいうえお」の50音を紹介する課で、それぞれの平仮名が明朝体で大きく印刷されている。例えば「あ」では

あ

となる。私達日本人はこの印刷文字を見慣れているから、これと違って違和感を覚えることはない。しかし、よく見て頂きたい。1画目、2画目、3画目とそれぞれの始まりが、異様に曲がっている。これは言うまでもなく毛筆のイメージである。しかし、初めてこの文字を見るロシア人が、「これは筆で書かれたタイプであつて普段書く文字とは別なものだ」などとどうして分かるだろうか。当然、こうした細部にわたるまで、忠実に覚えて書いてしまう。

こうした状況から、文字を毛筆のスタイルで書いてしまっている学生が大変多いのである。その代表的なものを挙げると以下の通りである。

「お」「き」「な」「ね」「ふ」「む」「も」「や」「ら」「り」「れ」「わ」

以上に挙げたものを、そのままペンで書くと不自然に見えるだけでなく、画数にも誤りが生じてしまう。例えば「お」は、よく見ると2画目が一筆ではなくなっている。「な」においては、3画目と4画目がつながっている。このように、明朝体で印刷されたものをそのまま覚えると、不自然な筆記となってしまうのだ。

また、以下に挙げるものは、学生達が「はね」を強調しすぎてしまう文字の例である。

「け」「た」「に」「は」「ほ」「を」

以上にみられるように、教科書には、明朝体で平仮名や片仮名、それに漢字が紹介されており、学生が正確な筆記を学習しにくい状況になっているのである。学生にとってお手本となるべき教科書に、本来は書かれない字体で文字が紹介されている。こうした現状を見過ごすわけにはいかないであろう。

筆者は、とある大学の日本語授業を見学した折、ロシア人の教師までもが、黒板に大きく、「ミミズの這うような」字で、しかも明朝体を忠実に再現して書いている光景を目の当たりにした時は驚いた。そのため、当然そこで学ぶ学生が書いたものも、どれも例外なく不自然極まりなかった。学生の手前、教師の筆跡を訂正することは避けたが、やはり日本語を学ぶ以上、きれいにそして正確に書くという日本の文化をも汲み取って頂きたい。

「実際に書く文字は印刷される文字とは若干異なる」という基本、そして「字をきれいに書く」という文化については、初級学生が最初に文字を学ぶ段階で、指摘しなければならない。一度誤って覚えたものを訂正するのは、学習の二度手間となるからである。また何よりも、ロシア人教師は、こうした文化をよく理解し、学生達の筆跡を指摘修正できるだけの力量を兼ね備えておく必要がある。

また、冒頭に記したように、学生が上手に字を書けないそもその原因は、教師を越えて教科書にあるということをもう一度繰り返したい。学生が手本とするべきその教科書に、実際には書かれない字体で大きく印刷されている。ソ連時代はこれでも問題はなかったかもしれないが、これからはそうはいかないであろう。というのは、日本人との付き合いにおいて、筆跡の良し悪しは重要な意味をもつからである。このような現状が続く限り、自然な字体で書く学生が稀なのも当然である。

近年の日本の初等中等教育現場では、手書き文字への影響が考慮され、「教科書体」という自体が採用されつつある。ロシアで出版されている日本語教科書にも、早い段階で採用されることを望むものである。

(2) キリル日本語

ロシア人教師のもとで学ぶ多くの学習者の中には、共通のロシア語的な発音が備わっている。その原因として、第一に挙げたいのは、やはり教師自身の発音であるが、筆者はもう一歩奥に、さらに根源的な原因があると考え。それは、教科書である。

現在ロシアで大変広く使用されモスクワ大学でも使われているある教科書を含めて、多くの教科書に、学生の正確な発音を妨げる原因、つまり、日本語のキリル文字による読み仮名が記されている。

この読み仮名をもとに練習する学生は、日本語らしくない、ロシア語的な発音を身に付けてしまう。一般的に、ある言語の発音を、他言語によって表記することには、大変な困難が伴う。それは、日本人にお馴染みの「カタカナ英語」と同様の現象である。この場合は、「キリル日本語」とでも呼ぶことができよう。

そもそも、このキリル文字による読み仮名は、周りに誰も日本語を話す人がいない独習者に向けて施されたものであろう。音が分からなくては学習者が満足しない、という理由で「仕様がなく」施さ

れたものである、と解釈したい。しかし筆者は、そうした独習者とは事情が異なる大学の授業において、ロシア人教師が日本語をキリル文字の読み仮名によって学生に読ませている光景を幾度となく目にした。そして教師自身も同様に「キリル日本語」で学習者を指導しているのだ。

具体的な例を一つ挙げてみよう（ここで筆者は、ロシア人話者による不自然な発音を、片仮名で表記しようと努めるわけだが、上に記したように、その正確な再現は難しい。実物により近いと思われる形をとって記してみたい。「私はロシア人です」という文の発音は以下の様になる。

ヴァタシ ヴァ ロシアジン デスウ。

ここで彼らは下線の部分をやや長く強く発音する。これには日本語とロシア語のアクセント法の違いが起因している。

日本語（東京アクセント）で「あめ」と発音する場合、「あ」のほうを高く発音すれば「雨」という意味になり、「め」のほうを高く発音すれば「飴」という意味になる。このように日本語では、音の高さ（ピッチ）によって単語を区別することがあるので、高低アクセント（高さアクセント）と呼ばれている。

一方ロシア語のアクセントはそれとは異なり、各単語内の1音節にストレスを置く、強弱アクセント（強さアクセント）と呼ばれるアクセント法がとられている。アクセントの置かれた母音は強くかつ長めに発音されるのである。

よって上記の発音は、学習者が強弱アクセントを用いて日本語を発音していることになる。筆者が多くの学習者と接する中で得た印象によれば、ロシア人は一般に、日本語の高低アクセントを習得する過程において、なかなか強弱アクセントを脱することができない。よって、「これはなんですか？」という疑問文では、普通最後の「か」を上がり調子で発音して尋ねるところを、ロシア語の強弱アクセントで、「なん」を強く発音してしまい、怒っているようなニュアンスとなる（これはなんですか!？）発音になってしまっている学習者、教師が多く見受けられた。

ここで、ロシア人がキリル文字を頼りにして日本語を読むときに現れる、代表的な特徴、及びその例を音声学的にいくつか整理しておこう。

①「お」を「あ」に近い音で読んでしまう。（「こんにちは」→「カニチワ」）

これには、ロシア語の強弱アクセントが影響している。上で述べたように、ロシア語ではアクセントを置かれた母音は強くかつ長めに発音されるのに対して、アクセントのない他の母音は、相対的に弱く短めに発音される。そこでロシア語では、アクセントのない「o」を[a]と発音することになっている。従って、上記の例では、「こんにちは」の「に」に強弱アクセントを置いた結果、頭の「こ」の母音が[a]に変化し「カニチハ」となる。（他にも、「英語」を「えいが」、「お兄さん」を「あ兄さん」等々）

②「う」の発音を強くしすぎる。（「つくえ」→「ツウクエ」）

日本語の「う」は、円唇性を帯びない後舌母音として、つまり舌を奥に引き、唇を円めない状

態で発音される。それに対してロシア語では、舌を奥に引くことは共通するものの、唇に関しては、両唇を、口笛を吹く時のように円めて、前に突き出して発音する。よって、日本語の「う」と比較すると、かなり硬い音となる。これを日本語に適用すると不自然に聞こえてしまう。

③「ら行」を発音するとき、まき舌を用いてしまう。

日本語とロシア語では[r]を発音するとき、その調音法が大きく異なる。日本語では「弾き音」が用いられ、舌が歯茎をなでるように1回弾いて発音される。それに対し、ロシア語では、「震え音」が用いられる。いわゆるまき舌で、上に向かって立てぎみにした舌を声を伴った呼気によって弾き、上の歯茎や前口蓋にぶつかって得られる音である。よって、ら行を「震え音」で発音した場合、威勢のいい、悪くいえば品の悪い音となってしまう。

④「わ」を「ヴァ」と発音してしまう。（「わたしは」→「ヴァタシヴァ」）

日本語のワ行子音は、両唇軟口蓋-接近音である。つまり、摩擦が響かない程度に後舌を軟口蓋に接近させ、且つ唇も狭めて発音される。しかし、ロシア語には、これに似た音がないことから、日本語をキリル文字で表記するにあたって、最も近い音として[v]で代替されているのである。[v]は、唇歯音であるため、当然日本語らしくない音となって発音されることになる。

以上に挙げたように、ロシア語と日本語の発音には様々な違いがあるにも関わらず、それを強引に一方の文字で表記してしまっただけでは、問題が生じるのは当然である。上に述べた点に関しては、少なくとも初級の初期段階で、学習者にその違いを紹介し、より自然な発音で練習を行っていききたいものである。

日本語を学習する学生達に、より自然な発音を身に付けてもらうためには、このキリル文字による読み仮名を見直していく必要がある。

（3）ソ連時代の名残

現在モスクワの書店で販売されている日本語の教科書や参考書をみると、一部、大変な間違いを含む出版物が並んでいることに気付く。最近になって、優れたものも多くなってきてはいるが、依然として問題とすべきものが堂々と売られている。それらをみていて気が付くのは、そこにソ連時代の日本語教育の名残が見て取れることである。

まず、その一例として、一冊の教科書を取り上げてみたい。それは1999年に発刊されたもので現在でも多くの書店に並んでいる（「Основные грамматические конструкции современного японского языка」、Ю.П.Киреев、Москва）。そこには多くの誤った表現が「例文」として収録されている。それらの一部をここに記してみよう。

- ・ 今日の日は静かなであってとても暖かいです。
- ・ 太陽が立ち上がったなら明るく成ります。
- ・ 大学に歩いて行くと授業を思います。（「大学へ行けば授業のことを考えてしまう」と言いたい）
- ・ 攻撃は行われまますばあい私達は火を始めましょう。

- ・ 私は話しているあいだ黙っててください。
- ・ あなたは来る前に電話で掛かってください。
- ・ 彼は立派な通訳でなくてはならない。（「彼は立派な通訳に違いない」と言いたい）
- ・ この博物館はとても良く訪られています。
- ・ 私は病気されました。
- ・ 私は日本語の本を読まれます。
- ・ 君は数キロメタ歩かせられたか。
- ・ 彼は自分の兄弟に数万年筆と数鉛筆を直って呉れました。
- ・ 私は非常になかがすきました。

と枚挙に暇がない。確認しておきたいが、これは「誤用例集」ではない。れっきとした日本語の教科書である。そこに、こんな表現がいくつも載っているのは全く話にならない。これが店頭に並んでいる以上、当然買う人も多くいるわけである。筆者が教えていた学生の中にも、何も知らずにこの教科書を購入して、学習していた人が何人かいた。

こうした誤った表現をみていると、この著者が、ソ連時代からどのように日本語を学習してきたかが伺える。先に述べた、いわゆる「置き換え勉強」の形跡が色濃くみてとれるのだ。一つの文法があれば、それはいかなる言語に対しても適応すると信じる。上に挙げた例は、このような姿勢から生まれたものであると考えられる。

筆者がこれまで接したロシア人の日本語学習者には、いずれも、上に挙げた誤用例と近似した誤りをする傾向がみられた。その意味で、今日のロシアにおける日本語教育には、ソ連時代からの語学教育に対する姿勢、そしてその教授法が、根強く残っているといえるのである。

ここで、稲垣滋子氏の論文から若干引用したい。

筆者が1993年9月から翌年3月まで教えたモスクワ大学付属アジア・アフリカ諸国大学においても、基本的には文法訳読法で、それに最近の視聴覚教材を使っの種々の教授法が取り入れられている。この大学の学生の日本語は、話し方においても、一つの文を完全に終わらせるまで、語順の入れ換え（付け加えなど）をせずに話すというやり方で、書き言葉がそのまま会話にも使われることに気付く。（稲垣、1995、p.299）

これは93年から94年の資料であるが、筆者が2001年から03年にかけて日本語教育現場をみた際も、引用と同じ内容のことを感じた。

概していえば、ロシア語を母語とする日本語学習者の日本語には、堅い表現が多く見受けられる。上の引用で触れられる「文法訳読法」の是非はここでは問わないが、確かに彼らの日本語は、「書き言葉がそのまま会話にも使われる」という点に特徴付けられている。

本章第1節で簡単に触れたが、ソ連時代の語学教育の目的は、文書・図書・設計図等の翻訳、また要人との通訳に当たる国家の語学専門家の育成にあった。従って目標とされる日本語は公式の場で通用する折り目正しいものでなければならなかった。従って、与えられた内容を正確に理解し伝える技能の習得に学習の焦点が当てられていたのである。

ソ連時代、モスクワ大学付属アジア・アフリカ諸国大学では、在学中に通訳として実習することが義務付けられていた。それも個人対個人よりは団体と団体との通訳が主流であった。当然、代表挨拶やスピーチといった、改まった場面での通訳が多い。こうしたことから、学習者は、比較的早い段階から、高度な語彙や表現を耳にしたり教えられたりすることになる。本来は難しい言い回しであるのに、こうした学習者にとっては耳慣れた親しい語句になっている。その結果、特に改まるわけでもない平常の会話や作文などで頻繁に、そうした固い表現を使用してしまうことになるのである。

こうした、語学教育に対する姿勢の流れは、日本語を教える教師、そして教材にも受け継がれて現在に至っているものと思われる。

以上問題点を分析してきたが、ロシアにおける日本語教育は、ソ連時代から独自の方法論で語学教育を進め、大変多くの優秀な日本学者、日本語学者等を輩出してきていることも確かな事実である。その上で、ソ連崩壊から15年経った今、学習者が最も必要としている日本語教育の在り方、そして学習内容をさらに掘り下げ、ロシアにおける日本語教育の発展をより確実たらしめることが、喫緊の課題といえよう。

IV. 場所を表す格助詞「に」と「で」

一般に、場所を表す格助詞「に」と「で」は、日本語を第2言語として学ぶ学習者にとって、最も誤りをおかしやすい項目の一つである（迫田、2001；久野、2003）。ロシア語を母語とする学習者にとっても、それは決して例外ではない。

日本語における格助詞「に」と「で」には、ともに「場所」を表す機能がある。通常、「物や人の存在場所」を示すためには「に」、「動作や作用が起こる（行われる）場所」を示すためには「で」が用いられる。

格助詞「で」は、もともと「に」の機能を補うべく存在していた格助詞「にて」が、平安時代末期になって音変化して成立した助詞である。「で」は、鎌倉時代以降、「にて」に代替して盛んに用いられるようになり、室町時代には日常語として定着したと考えられている。一方「にて」は文章語化し、それぞれ現代に至っている。

日本語教育において、格助詞「に」は、一般に初級の初期段階で以下の文型と共に紹介される。

「(場所) に (物) があります／(場所) に (人) がいます」

「(物) は (場所) にあります／(人) は (場所) にいます」

例：教室に机があります。／教室に先生がいます。

：机は教室にあります。／先生は教室にいます。

一方「で」は、動詞の「～ます」形と共に、次の文型の一部として導入される。

「(場所) で～ます」

例：教室で勉強します。

：電車の中で本を読みます。

以上の内容を学ぶ初期段階においては、「に」と「で」の混同は少ない。しかし、後に複雑になるにつれて、様々な形で誤用がみられるようになる。

本章では、日本語教育にあつて、場所を表す格助詞「に」と「で」を扱う際、どのような困難点が伴うかを、誤用例分析と、日本語、ロシア語の対照言語研究の2方面から分析し明らかにしたい。

1. 誤用例分析

(1) 分析1 連体修飾句を伴う誤用例

「(場所) に (物) があります」の存在文の場合、「に」を含む文節と「が」を含む文節の間に他の成分、殊に連体修飾句のようなものが入ってくると、次のような誤用が起こる。

- ・ 台所で私がつくったケーキがあります。
- ・ 大学の近くで私の通う病院があります。
- ・ そこで昨日買った本があります。

こうした誤用例は、それぞれ、「私がつくった」「私の通う」「昨日買った」のような連体修飾句が挿入されているために、それぞれの文中の「場所」が最寄りの動詞に引かれてしまったことに起因する。つまり「台所で...つくった」「大学の近くで...通う」「そこで...買った」というように格助詞「で」を誤って選択しているのである。「に」を含む文節と「が」を含む文節の間に連体修飾句の動詞が入ったとしても、存在文であることに変わりはない。よって、格助詞は「に」を用いて「台所に...あります」「大学の近くに...あります」「そこに...あります」と表現しなければならない。

(2) 分析2 存在場所への働きかけや到着点を表す「に」の用法

また、誤用を招きやすい「に」の用法として、存在場所への働きかけや到着点を表す用法がある。まずは、その代表的な誤用例を列挙しよう。

- ・ 私はモスクワで住んでいます。
- ・ 車で乗って大学へ通います。

これらの誤用はなぜ発生するのだろうか。

ここで「で」を用いてしまうのは、第一に、学習者は「に」は状態動詞の「いる」「ある」と共に用いられると強く意識していることが挙げられる。また、「住む」「乗る」は動作を表す動詞であり、動作の行われる場所を示すのだから、ここでは「で」が適当であると考えてしまう。

しかし、動詞「住む」や「乗る」は、場所や物に向けた動作を表す動詞であると考えられ、その対象となる場所や物は「に」で提示されるというきまりがあるのだ。よって上記の例では「に」を用いなければならない。

「に」は本来、存在の場所を提示する用法をもっている。しかし、その用法が派生し、存在場所への働きかけや到着点の提示、そして動作の及ぶ対象（人・物）をも表すようになったのだ。そのため、学習者には、「に」の用法が多岐にわたっているような印象を与えている。

ここで、上記のように、「に」を用いるべきもので、学習者が「で」を用いがちな動詞を含む文を以下にまとめておきたい。

所有物

- ・ モスクワ郊外に別荘をもっています。
- ・ 大学の近くにアパートを借りています。
- ・ 銀行にお金を預けました。
- ・ 市の中心にマンションを買った。（「で」を用いることも可能であるが、その場合、存在場所ではなく、動作の行われる場所を示す文となるためここでは適さない。）

生産物、出現物、発生物

- ・ 森に物置を作りました。（「で」を用いることも可能であるが、その場合、存在場所ではなく、動作の行われる場所を示す文となるためここでは適さない。）
- ・ 顔にニキビができた。
- ・ 庭に花が咲いています。

認知物

- ・ 水平線に蜃気楼が見えます。
- ・ あそこに UFO が見えました。（「で」を用いることも可能であるが、その場合、存在場所ではなく、動作の行われる場所を示す文となるためここでは適さない。）

動作の帰着点（移動動詞・設置動詞と共に）

- ・ 部屋にベッドを置きました。
- ・ 温泉に入りましょう。
- ・ 楽器に触る。
- ・ 廊下に絨毯を敷く。
- ・ ソファーに腰掛けました。

上に挙げた文の内、「市の中心にマンションを買った」を例にすれば、「買った」という動詞自体は動作を示すのであるが、その動作の結果として、市の中心に所有物としてのマンションが存在していることから、これは「動詞文」であるのと同時に、「存在」を表す文としても考えられるのである。

このように、述部に「ある」とか「いる」はないが、所有物、生産物、出現物、発生物、認知物な

どの存在場所、そして移動動詞・設置動詞を伴う動作の帰着点を表す場合は、格助詞「に」を用いるのである。

以上の点を見落とした誤用例が頻繁にみられる。それは、格助詞「に」と「で」が導入される時点でなされるそれぞれの用法の説明に原因がある。「動作・作用の行われる場所」は「で」を用いて示す、との説明にはなんら問題はない。むしろ初級の初期段階では、この説明に留めておく方が、学習者に複雑な印象を与えずにすむであろう。しかし、後に連体修飾句や、また様々な性格の動詞を学習する中で、それまでの説明だけでは対応し切れない部分が出てくる。いわゆる動作を示す文であっても「に」を用いる場合が生じるのである。

鈴木忍氏は、その時には「で」の用法を「依拠性をもたない動詞の表す動作・作用の行われる場所を示す」と説明する（鈴木、1978、p.7）教授案を提示している。それはひとつの決まりとして有効であるかもしれないが、やや漠然としている。むしろ「に」を要求する動詞は上記のようにある程度限られているのだから、それぞれの例文を通して、動詞の語義と格助詞の性格の複合的な理解を促進することが、学習者の誤用を防ぐ道であると思われる。

2. 対照言語研究と語学教育

現在日本で行われている日本語教育の現場では、様々な母語をもつ学習者がひとつの教室で学ぶケースが多くみられる。そうした教育現場では、誤用が発生する箇所が、多くの学習者に共通していることから、誤用分析の際、それぞれの学習者をもつ母語の干渉には重きを置かず、日本語を第2言語として学ぶ上での共通の困難な点として、分析・研究される傾向がある。実際、教育現場にあっては、各国の学習者の母語に焦点を当てているときりがなく、との切実な声もあるのだ。

しかし一方で、学習者のもつそれぞれの母語が、日本語とどのように相違し、また類似しているかを知ることは、日本語習得過程にあつての困難点を予測する上で大いに役立つ。また、それに対する適切な指導法、教材を準備する上でも、効力を発揮しよう。そうしたことから、対照言語研究がもたらす研究成果の語学教育への応用・貢献に期待が高まっている。

そもそも対照言語研究（сопоставительное изучение языков）は、言語教育への応用という目的から出発している。そこから、他言語との比較・対照を通じて特定の言語の特徴をより深く把握したり、また、多くの言語を、共通の枠組みの中で分析する中で、言語一般レベルでの共通項や特徴を発見するなど、大きな成果をあげている。自動翻訳システムの開発にも、対照言語研究の成果が生かされている。

殊に、海外における日本語教育では、学習者の母語が共通していることが多い。よって、日本語と学習者の母語との対照言語研究が、日本語教育の質を高める上で、より一層重要となることはいうまでもない。

次節では、日本語を第2言語として学ぶ学習者が誤用をおかしやすい項目のひとつである、場所を

表す格助詞「に」と「で」を、ロシア語との対照言語研究の立場から分析していきたい。

3. ロシア語と日本語の対照言語研究的地からのアプローチ

(1) 前置詞「в」と格助詞「に」と「で」

ロシア語は、場所をどのように表現する言語であろうか。

まず、以下の例文を見ていただきたい。

(1) Он **в ресторане**. / 彼は**レストランに**います。

彼 レストラン

(2) Он **обедает в ресторане**. / 彼は**レストランで**食事しています。

彼 食事している レストラン

上記のロシア語の網をかけた部分「**в ресторане**」がそれぞれ日本語の(1)「レストランに」と(2)「レストランで」を意味している。

「в」はロシア語の前置詞で、後続の名詞が前置格をとった場合に、場所を表す「～に」「～で」という働きをする(後続の名詞が対格をとった場合は、方向性を有する運動「～へ」等を表す)。この場合、後続の名詞「**ресторан**(レストラン)」が前置格「**ресторане**」をとり、場所表現となっている。

(1)(2)の例文から分かるように、「存在場所」と「動作・作用の起こる場所」の区別はなく、どちらも「**в** + 名詞(前置格)」で表している。

後続の名詞が前置格の場合の(「前置格支配の」と表現される)「в」の用法は、辞書に以下のように記してある(以降、辞書の出典は露和辞典、研究社、1988による)。

- 1 a) ((内部空間)) ...の中に, ...の中で
b) ((近辺・疎隔を指示して)) ...のあたりに
c) ((述部を形成する)) ...にある
- 2 a) ((組織・機関)) ...で, ...に
b) ((分野・領域)) ...で, ...において, ...における
- 3 ((その他の内部位置)) ...のなかで, ...において

つまり、「в」は「存在場所」と「動作・作用の起こる場所」の両方の意をもっているのである。また「в」の大きな特徴として1 c)に注目されたい。そこには「((述部を形成する)) ...にある」と記してある。これは、上の例文(1)の用法である。

ここでは「он(彼)」と主語を示した直後に、「**в ресторане**(レストランに)」を置き、それだけで「彼はレストランにいる」という文を構成している。つまり「в」は、前置格支配の場合、主語と共に用いるだけで「(人)は(場所) **にいる**」「(物)は(場所) **にある**」と述部を内包した文を構成するのである。

一方、例文(2)では「он」と「**в ресторане**」の間に動詞「**обедает**(食事している)」が挿入さ

れている。これにより、場所を示す「в ресторане」は、(1)の存在場所を示す意味から、食事という動作が行われている場所を示す意味に切り替わっているのである。その結果、日本語訳の格助詞は「に」から「で」に切り替わり「彼はレストランで食事している」となる。

ここまでで明らかになったことをまとめると、以下のようになる。

	に	で	в
存在場所	○	×	○
動作・作用が起こる場所	×	○	○

- * 1 日本語は文中、格助詞「に」と「で」を用いて、「存在場所」と「動作・作用が行われる場所」を厳密に立て分ける言語である。
- * 2 ロシア語は文中、「存在場所」と「動作・作用が行われる場所」を区別しない。
- * 3 ロシア語の前置詞「в」は、「存在場所」と「動作・作用が行われる場所」を区別せず、その両方を表すことができる。

* 1で示した内容は、日本人にはごく当り前のことである。しかし、その「当り前」も他の言語を鏡としてみたとき、ひとつの「特徴」として反映するのである。* 2、* 3に関して日本人が不思議に思うのと同様、ロシア語を母語とする学習者が日本語の場所表現を学ぶ際、「に」と「で」をもって「存在場所」と「動作・作用が行われる場所」を立て分けることに違和感を覚えるに違いない。

(2) 前置詞「на」と格助詞「に」と「で」

ロシア語には場所を表現する前置詞として「в」の他に、「на」という前置詞も存在する。次に、この「на」を用いた用例を分析したい。

(3) Туалет **на втором этаже.** / トイレは**2階**にあります。

トイレ 2階

(4) Он занимается **на втором этаже.** / 彼は**2階**で勉強しています。

彼 勉強している 2階

上のロシア語文の網をかけた部分「на втором этаже」が、それぞれ(3)「2階に」と(4)「2階で」を意味している。

「на」は上で示した通り、ロシア語の前置詞で、後続の名詞（この場合では2階「второй этаж」）が前置格をとった場合に、場所を表す「〜に」「〜で」という働きをする（後続の名詞が対格をとった場合は、方向性を有する運動「〜へ」を意味する）。(3)(4)の例文から分かるように、「存在場所」と「動作・作用の起こる場所」の区別はなく、どちらも「на + 名詞（前置格）」で表している。

また、例文(3)は「на втором этаже」のみによって述部を形成していることから、助詞「на」は、「в」の場合と同様、前置格支配によって「(人)は(場所)**にいる**」「(物)は(場所)**にある**」との述部を含んだ存在場所の文を構成できることがわかる。

一方例文(4)も、「**в**」の場合と同じで、「**он**」と「**на втором этаже**」の間に動詞「**занимается** (勉強している)」が入ったことから、「**на**」の機能は存在場所から動作が起こる場所へと切り替わって「彼は2階で勉強している」との文が構成されている。

よって、ここまでで分かった事柄を、先の表に加える形で示すと以下ようになる。

	に	で	в	на
存在場所	○	×	○	○
動作・作用が起こる場所	×	○	○	○

*4 ロシア語の前置詞「**на**」は、「存在場所」と「動作・作用が行われる場所」を区別せず、その両方を表すことができる。

ここで1つの疑問が提起される。*3、*4によると、「**в**」も「**на**」も、文中にあつて「存在場所」と「動作・作用が行われる場所」を区別しないことがわかった。ではロシア語では、「**в**」と「**на**」はどのように区別されているのだろうか。

(3) 前置詞「**в**」と「**на**」

以下の例文を分析したい。

(5) Бумаги лежат **в** столе. / 紙は机の中にある。

紙 横たわっている 机

(6) Бумаги лежат **на** столе. / 紙は机の上にある。

紙 横たわっている 机

最初に、動詞について説明しておこう。ここで用いる動詞「**лежат**」は、人・動物や物が横たわっている状態のときに用いられるもので、この場合、紙が寝かせて置いてある様を表す(ロシア語では立てかけた状態で置いてある様を表す別の動詞もある)。その日本語訳は、単に「存在」を表すこともあるので、上の日本語訳では「ある」を用いた。格助詞は、双方「**に**」である。

さて、ここで注目したいのはロシア語前置詞「**в**」と「**на**」が、意味内容にどのような違いをもたらしているかである。

例文(5)で「**в** столе」が「机の中に」と意味しているのに対して(6)の「**на** столе」は「机の上に」と訳されている。つまりロシア語における前置詞「**в**」と「**на**」は、それぞれの対象の位置する場所の性格を区別している。

前置詞「**в**」の意味として、先に挙げた辞書に「1 а) (内部空間) ...の中に, ...の中で」との表記があったのはこのことを指している。つまり、前置詞「**в**」の対象の位置する場所の性格は、「内部空間」と特徴付けられているのである。

では前置詞「**на**」は、どうであろうか。前置格支配の「**на**」について、辞書には以下の記述がある。

1 а) (表面・平面上の位置) ...の上に, ...に, ...で

- b) ((特定の名詞と共に静止位置・内部位置)) ...で, ...に, ...において
- c) ((目的を伴った場所)) ...で, ...に
- d) ((川・湖・海)) ...で, ...に, ...のほとり [岸] に
- e) ((山・島・半島)) ...で, ...に
- f) ((天空・天体)) ...に, ...で
- g) ((固有名詞)) ...で, ...に
- h) ((方角)) ...で, ...に
- i) ((高度・深度)) ...で, ...に

この記述を見ると「...に, ...で」とあり、先に述べたように「на」は「存在場所」と「動作・作用の起こる場所」を双方表現し得ることが確認できる。

その上で1 a) をみると「((表面・平面上の位置)) ...の上に, ...に, ...で」と記されている。つまり「на」は、その対象が位置する場所に関して、「表面・平面上」という性格を帯びた場所と指定しているのである。また、b) から i) に渡って、その意味する内容が具体的に列挙してある。これは、前置詞「на」が意味する範囲がある程度限定されていることを示しているのだが、それらについては後で触れよう。

ここまでで分かったことを表にまとめると次のようになる。

		に	で	в	на
存在位置	内部空間	○	×	○	×
	表面・平面上	○	×	×	○
動作・作用の起こる場所	内部空間	×	○	○	×
	表面・平面上	×	○	×	○

- * 5 ロシア語では、人、物、その他の場所を表現する際、それらの位置する場所が「内部空間」であるか、「表面・平面上」であるかを、前置詞「в」「на」をもって立て分ける言語である。
- * 6 ロシア語の前置詞「в」は通常、「内部空間」という性格を帯びた場所に位置する人、物、その他を示す際用いられる。
- * 7 ロシア語の前置詞「на」は通常、「表面・平面上」という性格を帯びた場所に位置する人、物、その他を示す際用いられる。
- * 8 日本語の格助詞「に」と「で」はそれぞれ、「内部空間」と「表面・平面上」のどちらをも表現できる。

以上のことをもとに例文 (5)、(6) を分析してみよう。

(5) では「机の中に」の対訳として、前置詞「в」を用いて「в столе」としている。これは、紙が位置している場所が「机の中」であり、それは* 6 に示したとおり、「内部空間」だからである。よ

って、日本語訳では、「引き出しに」としても正確な訳といえる。

一方例文(6)は、紙の位置する場所は机の上、つまり「表面・平面上」である。よって、*7に示したとおり、前置詞「на」を用いて「机の上」と表現しているのである。

以上のように、ロシア語では、場所を表現する際、その対象が「内部空間」に位置しているか、「表面・平面上」に位置するかを、立て分ける言語であることが分かった。

原則としては上で説明した通りであるが、ロシア語には、慣用として、「в」しかとらない名詞、あるいは「на」しかとらない名詞が存在している。後続にそうした名詞を支配する場合は、上記の原則があてはまらないケースが生じる。それぞれの名詞が、どのような理由で「в」をとるか、「на」をとるかを解明することは極めて困難であり、現在のところまだ、明解な説明はなされていない。

しかし、いずれにせよ、ロシア語において場所の表現を行う際、それが「内部空間」にあるか、あるいは「表面・平面上」にあるかを意識し、区別するという原則は一貫しているのである。

(4) 前置詞「на」を要求する名詞

前置詞「на」をとる名詞はある程度限られているので、ここにその代表的なものを列挙したい(日本語訳の格助詞は「で」で統一した)。

- ・会議関連 「на собрании会合で」「на заседании会議で」「на конференции会議で」「на съезде集会で」
- ・催し物関連 「на концертеコンサートで」「на вечере夜会で」「на вечеринкеパーティーで」「на выставке展覧会で」「на работе仕事で」
- ・授業関連 「на уроке授業で」「на занятиях授業で」「на лекции講義で」「на экзамене試験で」
- ・教育機関関連 「на факультете学部で」「на отделении支部で」「на кафедре学科で」「на курсе学年で」「на курсах講習会で」
- ・施設関連 「на заводе工場で」「на фабрике製作所で」「на вокзале駅で」「на стадионеスタジアムで」「на почте郵便局で」「на станции駅で」
- ・通り関連 「на площади広場で」「на улице通りで」「на проспекте大通りで」「на бульваре並木道で」「на шоссе街道で」(但し「в переулке路地で」)
- ・岸辺関連 「на озере湖畔で」「на море海辺で」「на берегу岸辺で」「на Волгеボルガ川で」「на Байкалеバイカル湖で」「на реке川岸で」(「в реке」とした場合、「川の中で」を意味する。例：купаться в реке (川で水浴びする))
- ・方角関連 「на востоке東で」「на западе西で」「на юге南で」「на севере北で」「на юго-западе南西で」
- ・建物関連 「на этаже階で」「на лестнице階段で」「на балконеバルコニーで」「на верандеベランダで」「на террасеテラスで」
- ・島関連 「на острове島で」「на полуострове半島で」「на Хоккайдо北海道で」「на Кюсю九州で」

「на Сахалинеサハリンで」「на Камчаткеカムチャツカで」「на Курильских островах千島列島で」「на Японских островах日本列島で」「на Кубеキューバで」「на Филиппинахフィリピンで」「на Кипреキプロスで」（但し「в Японии日本で」）

- ・地名関連「на Украинеウクライナで」（形容詞を伴った場合は「в」をとる。例：в западной Украине（ウクライナ西部で））「на Уралеウラルで」「на Кавказеカフカスで」「на экваторе赤道で」「на полюсе北（南）極圏で」「на родине故郷で」「на чужбине異郷の地で」「на Русиルーシで」（形容詞を伴った場合は「в」をとる。例：в древней Руси（古代ルーシで））

「на」を要求する名詞は、以上のように、ある程度カテゴリー化して整理することができる。その中には、「на площади広場で」の「広場」のように、明らかに「表面・平面上」を表しているものもあれば、「на факультете学部で」のように抽象的な意味合いから「на」を要求している名詞もある。また「郵便局」「工場」「駅」等は、元来は屋外にあったことから「на」を要求する、というように語源から説明できるものもある。

改めて、言語とは、単に意思伝達の道具として発生し進化してきたのではなく、それをを用いる人々の習慣・文化・伝統・考え方、また気候等、あらゆる要素を複雑に取り入れながら受け継がれ、今日に至っているものであることを実感させられる。

（5）対照言語研究の日本語教育への応用

以上、場所を表す表現に対する日本語での格助詞「に」と「で」の機能と、ロシア語の助詞「в」と「на」のもつ機能を対照言語研究の立場から分析してきた。この結果得られた観点を、ロシア語を母語とする学習者に対する日本語教育に、いかに応用できるだろうか。

第一に、上の分析結果を参照することによって教師は、学習者の場所表現に対するアプローチの仕方を、把握することができる。それは、必然的に母語から影響を受けている。学習者は、初出としての場所表現に出会った際、まず、自らの母語ーロシア語がもつ場所表現の文法構造をもって理解を試みる。その際に起こり得る難点を、教師は、あらかじめ予想し、教材や教授法を事前に準備できるのである。

第二に、「存在場所」と「動作・作用の起こる場所」という、日本語の場所表現に関する二つの概念と、また「内部空間」と「表面・平面上」というロシア語のもつ場所表現に関する概念を説明することにより、学習者は、両言語の背後にある発想の違い、文化の違いを垣間見ることができる。そしてその違いを意識することにより、学習者は、言語そのものだけでなく、言語にみられる種々の現象を統一的に捉える観点を身につけることができる。

また第三に、この対照言語研究で提示した場所表現に関する観点は、日本語、ロシア語以外の言語に対しても応用し得るものである。例えば、*1から*8で示した整理の枠組みは、日本語、ロシア語以外の場所表現の特徴を整理したり、ロシア語以外の言語を母語とする学習者の場所表現に関する誤用の背景を分析する際にも参考となるはずである。

この度の対照言語研究で得られた結果は、日本語だけ、あるいはロシア語だけをみていても、なかなか明らかにならない事柄である。一般に、ある言語の文法的特徴はその言語をみるだけでもかなりの程度把握することができるが、それぞれの表現に至る発想の領域に関してはそうはいかない。というのは、そうした領域はその言語の母語話者にとっては「当たり前」の事柄であることが多いからだ。その「当たり前」を「特徴」として捉えなおすには、やはり「他者を鏡にする」という作業が必要である。その意味で、より正確にひとつの言語を学ぶ際には、他言語との比較対照、つまり対照言語研究的アプローチがより大きな意味をもつといえるのである。

V. 終章

時の流れと共に、必要とされる言語も変化する。ソ連崩壊から15年。今日のロシア、そして旧ソ連圏諸国の巷では、多くの外国人旅行者やビジネスマン等が行き来し、また、閉鎖された社会で生活していた彼ら自身にもまた、世界へと足を踏み出すことの可能な時代が到来した。これまでの語学教育のスタイルが、大きく変容せざるを得ないときといえる。

これまで述べてきたように、ロシア語を母語とする学習者の日本語には堅い表現が目立つ。それは、彼らを取り巻く教育環境に起因している部分が大きいと考えられる。しかしながら、日本に留学している学習者たちの日本語を聞くと、やや堅さは残るものの、大変に流暢な日本語を話す学習者が多い。一概にはいえないが、彼らの日本語は、他の国々から来ている留学生のそれと比較しても、高いレベルに位置していることがわかる。日本に来て、実際に日本人と接する中で、また実際の日本語環境におかれる中で、軌道修正されるのであろう。このことは、彼らが日本に来るまでに受けてきた、ロシアでの日本語教育の質の高さを物語っているといえるのではないだろうか。

従って、日本語教育の変革が迫られているとはいえ、他国の日本語教育に追随していく必要はない。むしろ他国の実績を参考にしながら、これまで行ってきた教育スタイルの独自性を伸ばし、また短所を補っていく中で、ロシアにおける日本語教育はさらに発展するものとする。

一方、日本語を母語とする日本語教師にとっては、日本語だけを研究対象とするのではなく、外国語から日本語の特徴をみるという姿勢が、より豊かな日本語教育を可能にするひとつの手段として有効であるといえる。

本論文、IV. では対照言語研究の立場から、日本語教育における格助詞「に」と「で」を扱ったが、対照言語研究的なアプローチは、自らの母語を相対的な視点から捉えなおし、また、学習者の視点から日本語や日本人の言語行動をみつめるセンスを磨く上で、大きな効果をもたらす。「他者を鏡にすることによって、自らの『当たり前』を『特徴』として捉えなおす」という姿勢は、語学教育に留まらず、異文化間の交流にあっても重要な意味をもち、実際の教育現場にあつて、より質の高い日本語教育を可能にするものであろう。

本論文では、「ロシアにおける日本語教育の現状と問題点」と題し、様々な問題を扱った。しかしながら、他にも、問題とされるべき事象、改善されるべき点は多く存在しており、それらは、今後の研究課題としてさらに取り組んでいきたい。

最後に、筆者の本論文執筆を、陰に陽に日々励まし支えて下さった中村泰朗先生に、心より感謝申し上げます、終章の結びとしたい。

ロシアにおける日本語教育が益々の発展を遂げ、それが日露両国の親密なる友好関係に永く寄与し続けることを切に願いつつ。

参考文献

- 石川恵子「場所をあらわす格助詞『に』『を』『で』についての一考察 —中国人の日本語学習者の誤用例から—」、創価大学出版会、『創立10周年記念論文集』、1980
- 稲垣滋子「日本語の表記法に対する態度と文章理解力—ロシア語圏での調査から—」、東京堂出版、『日本語教育の課題』、IGU日本語教育四十周年記念論集、1995
- 井上優『言語の対照研究』の役割と意義、くろしお出版、<国立国語研究所編「日本語と外国語との対照研究X」『対照研究と日本語教育』>、2002
- 井上靖『おろしや国酔夢譚』、文春文庫、1974
- 今井洋子「上級学習者における『に』『を』の習得 —『精神的活動動詞』と共起する名詞の格という観点から—」、日本語教育学会、『日本語教育』、105号、2000
- 遠藤織枝「作文における語用例 —モスクワ大学生の場合—」、日本語教育学会、『日本語教育』、34号、1978
- 加藤好崇「日本語学習者の誤用に対する教師の非訂正行動」、日本語教育学会、『日本語教育』、93号、1997
- 久野美津子「ブラジル人幼児の場所表現『に』と『で』の習得過程」、日本語教育学会、『日本語教育』、117号、2003
- 熊谷智子『対照研究』と『言語教育』をつなぐために、くろしお出版、<国立国語研究所編「日本語と外国語との対照研究X」『対照研究と日本語教育』>、2002
- 国際交流基金（ジャパンファウンデーション）ホームページ <http://www.jpff.go.jp/j/>
- 鈴木忍「文法上の誤用例から何を学ぶか —格助詞を中心にして—」、日本語教育学会、『日本語教育』、34号、1978
- 鈴木睦「母語別教育・教材」、日本語教育学会、『日本語教育』、94号展望、1997
- セルゲイ・クズネツォフ（荒井稚子訳）「ロシアに渡った日本人」、東洋書店、『ユーラシアブックレット』、No.65、2004
- 外川継男『ロシアとソ連邦』、講談社学術文庫、1995
- 高見澤孟「はじめての日本語教育・2 [日本語教授法入門]」、アスク、1996
- 高見澤孟／監修・高見澤孟・ハント蔭山裕子・池田悠子・伊藤博文・宇佐美まゆみ・西川寿美／共著「はじめての日本語教育・1 [日本語教育の基礎知識]」、アスク、1996
- 東郷正延・染谷茂・磯谷孝・石山正三『研究社露和辞典』、研究社、1988
- 中村泰朗・V.S.グリーヴニン「<外国大学における日本研究の実態③>ソビエトにおける日本語・日文学の研究」、社団法人日本私立大学連盟、『大学時報』、vol.25、130号、1976
- 松崎寛・河野俊之『よくわかる音声』、アルク、2004、日本語教師・分野別マスターシリーズ「みんなの日本語」、スリーエーネットワーク、1998
- 矢沢理子「ロシア語圏の日本語教科書」、『第7回日本語教育連絡会議報告発表論文集』1994
- 矢沢理子「ロシアの日本語教育事情 —その伝統的教授理論と現在の動向をめぐって—」、『日本語教育学会寄稿集』、1996
- 山口明徳・秋本守英編『日本語文法大辞典』、明治書院、2001
- A.Г.Рябкин・Л.А.Лобачев・Л.А.Стрижак・В.А.Янушквский・Н.Г.Паюсов「Учебное пособие по японскому языку」、Институт восточных языков、1968
- Лен Уолш「Самоучитель японского языка」、Пионер、2002

Л.Т.Нечаева 「日本語ЯПОНСКИЙ ЯЗЫК」、Московский Лицей、1999.

Ю.П.Киреев 「Основные грамматические конструкции современного японского языка」、Москва、1999